

# 東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2017

## 「美しく生きる ～大学は知の宝庫～」

第5回 12/8（金）13:30～15:00 報告

進化する日本の図書館

講師 アンドリュー・デュアー（本学教授）

於：図書館大セミナー室

\*◆◆◆\*◆◆◆◆\*◆◆◆◆\*◆◆◆◆\*◆◆◆◆\*◆◆◆◆\*◆◆◆◆\*

平成29年度第5回公開講座（受講者31名）が12月8日（金）に開催されました。東海学院大学・東海学院大学短期大学部附属図書館館長および健康福祉学部管理栄養学科教授のアンドリュー・デュアー先生による「進化する日本の図書館」の演題でした。文字の起源、古代ローマの図書館の歴史を踏まえ、日本の公共図書館の歴史、建築と施設、機能、運営、子どもと図書館、これからの図書館について、事例を紹介しながらお話しいただきました。

文字の発明はメソポタミアでは約5300年、中国では4～5千年前のことであり、そのころからあった図書館は保管機能が一番重要視されていました。古代エジプトのアレクサンドリアの図書館には今の日本の県立図書館に相当する大きさの図書館には、50～80万冊が所蔵されていたと推察されています。そして、古代ローマには既に公共図書館が存在していました。日本では万葉時代から古文書はありましたが、海外のような図書館は存在していませんでした。江戸時代には藩や幕府が文庫をつくり、庶民は貸本屋で借りて読むのが一般的でした。当時の庶民の暮らしは、自然災害でモノがあつという間になくなってしまうこともあり、自宅ではモノを持たない生活文化であったとの説明が、図書館の歴史を理解するのに役立ちました。

明治維新では欧米諸国を視察した際に、図書館という概念を持ち帰ったものの、行政立国日本では、それまでの経緯から図書館なるものの活用の仕方が不明であり、必要性はすぐには理解されませんでした。しかし、当時の日本の識字率は世界一でした。古くから教育を重視し、寺子屋が充実していたからだそうです。

次にデュアー先生が日本に来られたころの公共図書館の様子が語られました。都内の図書館は蔵書が豊かでも使いにくかったり、施設がよくても本が少なかったり、使い勝手がよく居心地のよい現代のような図書館とはほど遠い状況だったことが伝わってきました。そのようななかで日本の公共図書館の在り方を改善してゆく使命感にも似た気持ちを抱かれたそうです。

次に興味深いお話は、図書館の競争相手が時代とともに変化してきたことです。昔は教科書や教師、貸本屋と書店が図書館の競争相手でした。今は学校や書店よりも、テレビ、ラジオ、映画、インターネットなどが図書館のライバルです。オンライン書籍の時代となり、市民は便利さと面白さを求めるようになりました。財政難のなかで、公共性の意味を考える必要性が生じています。図書館は手ごわい相手との競争に勝てないと存続できない厳しい時代です。さらに画像資料を通じて、図書館の建築と施設について学びました。

保管機能が最も重要だった時代の図書館では、閉架が一般的でした。利用者は棚から自由に書籍を手にとり、選ぶということがしにくい状況でした。建物も倉庫のようなものや、ビルの地下室のようなところが珍しくありませんでした。日本の図書館が大きく変化したのは80年代以降のことです。シンボリックな施設への批判や反省を踏まえ、公共施設としての図書館は生産性つまり教育水準の向上や、教育投資の対象として期待が高まりました。図書館が活発に利用されている街は教育水準が上がり、街の競争力も高まり、街の活性化の原点の一つであるというお話でした。

そしてこの5年ほどの間に市民の公共性への理解が増し、図書館の機能に対する期待も変化してきました。図書館は、調査研究や娯楽の場のみならず、市民活動の場として注目されるようになりました。移動図書館や市民が運営に参画する市民図書館のお話、指定管理者制度による新しい運営方法など、事例を踏まえて説明がなされました。図書館の利用の半分近くは子どもとその保護者です。子どもは街の未来につながります。

最後にインターネットと電子書籍時代の図書館の可能性について言及されました。図書館は、集える場、交流の場、人に出逢える場、街の知らない人同士が集まって活動を始める場所でもあります。他の公共施設にはこれほどの機能や人々の交流はありません。図書館はまだ進化を続けます。進化する図書館の話を通じて、改めて公共性に関して考える機会を得ることができました。

#### 【講座の様子】



